研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
A-134		20-063	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

A Social Ecological Approach to Hazardous Alcohol Use among Flemish Higher Education Students
ベルギーフランドル地方の大学生における危険な飲酒に対する社会生態学的アプローチ

執筆者

Tholen R, Wouters E, Ponnet K, De Bruyn S, Van Hal G.

掲載誌

Environ Res Public Health. 2020 Nov 9;17(21):8288.　doi: 10.3390/ijerph17218288.

キーワード	PMID
大学生、環境因子、政策、横断研究	33182481

要　旨

目的：アルコール乱用は、世界的に公衆衛生上の問題となっており、欧州の大学生にも広まっている。個人から社会全体レベルに至るまで、あらゆる要因の関連が指摘されているが、異なるレベルの影響について複合的に述べた報告は少ない。そこで本研究では、社会生態学的フレームワークを用い、複数の影響レベルからなる変数とアルコール乱用との関連を明らかにすることを目的とした。

方法：ベルギーフランドル地方の大学生の代表集団を対象に、オンラインの自記式質問票を用いた横断研究であり、条件（17-24 歳、この 1 年で飲酒歴がある、全ての項目に回答している）を満たす学生 21,854 名を対象とした。アルコール依存症スクリーニングテスト（AUDIT-C）のスコアを目的変数として、階層重回帰分析を行った。各レベルの評価項目は、個人（性別、学年、下宿有無、仕事有無、飲酒開始年齢、宗教を重要視するか、不安・うつ（GHQ-12 のサブスケール））、個人間（親の学歴、飲酒の問題が起きた時に親や友人に相談するか、他人をどれだけ信頼できるか）、組織（学生団体やスポーツチーム、青年運動のメンバーか）、地域（以下の項目がどの程度だと思うか：男子学生が 2 時間以内に 6 杯以上の飲酒をする頻度、通常の学生が酔いを感じるまで飲酒する頻度、通常の学生のいつもの飲酒量、また飲酒や薬物使用についてのテーマがカリキュラムに入っているか）、政策（毎年開催される公衆衛生啓蒙活動に参加したことがあるか：1 ヶ月間禁酒する活動）とした。

結果：個人、個人間、組織、地域、政策レベルのいずれにおいても、ほとんどの項目がアルコール乱用と関連を認めた。階層的重回帰分析の最終モデルでは、すべてのレベルの影響を考慮した結果、危険なアルコール消費の主要な説明変数は、男性（$\beta=0.28$、$p<0.001$）（個人レベル）、「Dry February」に参加していないこと（$\beta=0.26$、$p<0.001$）（政策レベル）、アルコール消費をめぐる社会的規範の保持（$\beta=0.20$, $p<0.001$）（地域レベル）、青少年運動のメンバーまたはグループ・リーダーであること（$\beta=0.14$, $p<0.001$）（組織レベル）、アルコール使用の開始年齢（$\beta=0.13$、$p<0.001$）（個人レベル）であった。これらの変数で、AUDIT-C スコアの分散の 39.9%を説明した。

結論：包括的な環境、社会規範、政策などが、学生が飲酒習慣を変える動機付けとなるため、政策立案者は、介入を考える際にあらゆるレベルの因子が関与していることを考慮すべきである。